



上海駐在員日記（その3）

茨城県上海事務所 海野 仁男

2016年4月から茨城県上海事務所に駐在員として勤務して1年半になります。3年の任期も折り返し地点を過ぎました。この半年間に上海で実際に自分が見聞きしたことや体験した事を中心に報告したいと思います。

事務所の概略について

まずは、事務所の概略を簡単に振り返ってみようと思います。茨城県上海事務所は、1996年11月に設立されました。当時既に上海にあった自治体事務所は、大阪府、長崎県、横浜市、静岡県、岐阜県の5事務所だけでした。現在は29事務所にまで増えているので、茨城県は比較的早い時期に進出したことが分かります。大阪府、大阪市、横浜市は友好都市、長崎県は友好交流都市になっている事もあり、やはり比較的早期に事務所を設立しています。

1990年代といえば、製造業を中心に多くの企業が中国へ進出した時期です。そのような状況下、茨城県も中国へ進出する県内企業のサポートをするため事務所を立ち上げました。最近では、中国へ進出する企業も減少し、新規進出というよりは、現地での販路開拓の協力や観光インバウンド、友好交流のための業務が増えています。事務所設立から既に20年が経過し、現在の職員は、私と所長の日本人2名、中国人2名の計4名になっています。

上海における自治体事務所について

上海の自治体事務所は、外部民間委託を含めて上海市内に29自治体が事務所を設置しており、

そのうち18自治体が茨城県上海事務所と同じ上海国際貿易中心ビルに入居しています。茨城県上海事務所と同じ17階のフロアにある自治体事務所は、神戸市、福島県、徳島県、熊本県（熊本市共同）の4事務所です。被災地が多いと思われていますが、それは偶然です。

また、貿易関係で協力いただくことの多いJETRO（日本貿易振興機構）や観光関連ではJNTO（日本政府観光局）、日中経済協会なども入居しており、このビルの入居企業の約7割が日系企業です。そのため日系企業への営業が効率よくでき、実際に飛び込み営業に来られる方が、かなりいらっしゃるようです。

ちなみに、在上海日本国総領事館も徒歩5分程の距離にあります。他の自治体の方と情報交換するのに素晴らしい環境であることに加え、日系企業が多いため、事務所の周りには日本人向けの飲食店が数多くあります。寿司、うなぎ、とんかつ、ハンバーグ、ラーメン、そばなどの日本食が手軽に食べられる環境が整っています。このあたりが、上海が日本人にとって生活しやすい都市だといわれる所以かもしれません。

新しい交通機関 BRT「71路」

旧正月、春節明けの2017年2月、上海市内に新しい交通機関が登場しました。BRT（バス・ラピッド・トランジット）の「71路」です。このBRT、上海では今回が初開通です。上海市内の外灘から虹橋方面の申昆路まで、延安路（東路、中路、西路）高架下の中央側バス専用レーンを東



■ BRT「71路」の路線図

西に17.5km走ります。この路線は浦西の黄浦区、静安区、閔行区、長寧区を通り、25の停留所を約80分で結んでいます。

延安路は最大で片側8車線もある広い道路ですが、いつも渋滞しています。その渋滞を横目にBRTが快走します。茨城県上海事務所の目の前にも71路のバス停があり、市内中心部や外難への移動も便利になりました。運賃はどこまで乗っても2元（33円）と割安です。先払いなので、下車するときはそのまま降りるだけです。日本の路線バスと異なり、降りるブザーはありません（降りる人がいなくてもすべての駅に停まります）。

BRTのメリットは、バス専用車線を走ること。バス停よりもしっかりした停車駅があること。一般的なバスやタクシーと比べ渋滞がないこと。電動なのでエコであること。ほとんどの乗り場が高架下なので雨の日の乗降車時に濡れないこと。地下鉄と比べ、運賃が安く、車窓の風景を楽しむことなどが挙げられます。

ただし信号待ちのロスがあったり、場所によっては地下鉄よりも時間がかかります。車両はバス



■ BRTがまちなかを走る様子

タイプの車両ですが、架線集電方式のハイブリッド車で、2連節バス（18m車）と単独の通常タイプバス（12m車）があり、それぞれBRT専用です。停車駅は中央分離帯のところに設けられているので、道路端のバス停に止まる普通のバスとは乗降口が左右逆になります。

BRTの開通に向けて、一般的な路線バスの廃止、路線短縮などの調整を行い、元のルートに近かった従来の「71路」の路線名が採用されました。ただし利用者が非常に多く、朝夕のラッシュ時は常に満員で、平日昼間でも途中から乗ると座れな

いことが多いのが欠点です。

そのことを除けば、地下鉄のように階段を下りたり改札を通ったりせず、すぐに乗れるBRTはともスムーズで快適です。ぜひ皆さんもBRT「71路」を使い、上海街歩きを楽しんでみてください。

極楽湯

中国を旅行したことがある方なら経験したことがあるかも知れませんが、中国のホテルには、バスタブがない事が多々あります。中国には入浴時はシャワーが中心で、湯船につかる習慣がありません。

しかし、中国の風呂文化がここ数年で変わりつつあります。訪日旅行者が増え、ゆったりと湯につかる日本式の温泉や入浴施設の魅力が徐々に広まってきたことが背景にあるようで、日本に行かなくても温泉気分が味わえる入浴施設が人気スポットとなっています。ハイシーズンの週末などは入場待ちの行列ができる程です。

日本の入浴施設大手「極楽湯」が上海に中国1号店をオープンしたのが2013年、2015年に上海2号店（金沙江温泉館）をオープン、2016年11月には武漢に中国3号店をオープンしています。

さらに、昨年末に大江戸温泉物語が上海にオープンしました。その真偽のほどは置いておくとして、これだけ入浴施設が増えているのは、需要が増えているためだと考えます。私も自宅から一番



■ 極楽湯内部の様子

近い極楽湯の2号店に行ってみました。入場料金は138元（約2,300円）で、日本よりも高めの料金設定になっています。

洗い場には、日本の施設よりシャワー数が多く、座って身体を洗える所はあまりありません。これは中国人が基本的に立ってシャワーで身体を洗う習慣だからだと推測できます。中国のゴルフ場の入浴施設には大きな浴槽がありますが、洗い場はシャワーブースになっていることが多いです。

上海の大江戸温泉物語は温泉ではなくただの入浴施設ですが、水（中国の水は硬水）を軟水に変換するろ過機を使っているため、洗髪後の髪はサラサラになります。軟水に比べ、硬水はシャワーなどで必要以上に体の油分をとってしまうといわれています。海外旅行に行って、入浴したら髪がパサパサになったり、肌が乾燥したような経験はないでしょうか？これは私自身も体感したことでありますが、その違いは歴然です。普段自宅で洗うとゴワゴワになる髪が、極楽湯で髪を洗った日は、サラサラになりました。

また、館内には様々な種類の湯（炭酸の湯、美肌の湯、電気の湯など）や五右衛門風呂、露天風呂、温箱（サウナ）などがあります。

さらに、6種類の岩盤浴施設や飲食施設、マッサージやエステなどのリラクゼーション施設、3Fが中国語、4Fが日本語の漫画&休憩コーナー、昼の休憩スペース、VIP用の個室など様々な施設



■ 温泉気分が味わえる入浴施設

があります。置いてある漫画もフロアーによって言語が異なるため、日本人は4階に集まるようになっています。

最初は「高いな」と感じた入場料金も、朝から晩までゆっくり一日を過ごせることを考えると、納得価格かもしれません。また、これは日本よりも高い料金を払える中国人中間層が増えているということでしょう。ちなみに利用者の8割前後が中国人で、日本人の利用はごく僅かです。中国の風呂文化も変わりつつあることを実感した一日でした。

上海タワー（上海中心大厦）

2016年夏からプレオープンしていた上海タワーが2017年4月に正式オープンしました。2008年11月の着工から8年近くかけての完成で、高さは632mと中国内で1番、世界で2番目に高いビルで、展望台の高さは546mもあります。高層建築物の世界第1位は、ドバイのブルジュハリファ（828m）です。東京スカイツリーは、高さ634mですが、展望台の高さは450mしかありません。

上海タワーのすぐ近くには、金茂大厦（382m）、上海環球金融中心（上海ワールドフィナンシャルセンター、通称栓抜きビル）（492m）、東方明珠電視塔（468m）などもありますが、これらのビルやタワーは遥か眼下に見えます。雲が多い日は、ビルの上層階が雲の中に隠れてしまうこともあります。



■ 上海のまちなみ



■ 上海タワー（右端）

上海タワーは、ガラス・カーテンウォールで外側を覆われたビルが螺旋状にねじれながら高くなっていくというデザインで、龍が天に昇っていく姿をイメージさせます。また、内側に9つの円柱状の建物が垂直に積み重なった構造を採用しており2重構造の建物になっています。

さらに、高さ546m（118階）の展望台までわずか55秒で到達する高速エレベーターは三菱電機製で、秒速18mです。3台のエレベーターの内1台は2秒速い53秒で到達し、最高速度は分速1,230mと世界最高速度を記録しています。こんなところでも、日本の技術が活躍していることはとても誇らしい気持ちになります。

最高気温40.9度

2017年7月、上海市は記録的な猛暑に見舞われました。最高気温が30度を超える日が続き、中旬頃からは連日37度の体温越えの日が続きました。

アスファルトの照返しが激しい市街地の体感温度は、50度近くになっていたのではと思います。さらに、7月21日には観測開始から145年で最高気温となる摂氏40.9度が観測され、電力消費も過去最高を記録しました。これまでの最高気温は、2013年8月7日の摂氏40.8度でした。

こんな猛暑が続く7月のある週末に「極楽湯」に行き、露天風呂に入りました。その時の露天風

呂の湯温計は40度、また、外気温も40度近くあり、お湯の中も外も温度差がないという状態で、肩まで湯につかりましたが、首から上と下で温度差が全然感じられないという、今までに経験したことのない不思議な体験をしました。



■ 「41℃」を示した携帯画面

8月後半になり、大分暑さが和らいできて、32度と聞くと凄く楽になった気がしてしまうほど、感覚が麻痺しています。しかし、30度超えですから、当然暑く、ちょっと外を歩けばすぐに汗が噴出してきます。連日の体温越えの日々を思えば、いぶん過ごしやすくなりましたが、秋が待ち遠しい今日この頃です。上海の異様な暑さをみると、地球の温暖化が進んでいるのではと危惧してしまいます。

中国には「高温手当」というものが存在します。法律で定められた手当で、日本企業が多い、北京、上海、天津、広東、江蘇、浙江、山東などの市や省で、6月から9月が支給対象期間となっています。市や省毎に手当額が決まっており、上海市は月に200元です。

高温手当は主に以下のような決まりがあります。

高温作業の基準：

1. 日中の最高気温が40℃以上の場合、当日の屋外作業は中止。なお、これにより労働時間が短縮されたとしても、その分を賃金から控除してはならない。
2. 日中の最高気温が37℃以上、40℃未満の場合、雇用企業は、労働者に6時間を超える屋外作業をさせてはならない。また、この場合、気温が最も高い時間帯の3時間は、労働者に屋外作業をさせてはならない。
3. 日中の最高気温が35℃以上、37℃未満の場合、雇用企業は、交代制で労働者の連続作業時間を短縮し、かつ労働者に屋外作業の残業をさせてはならない

また、高温作業場所の労働者に飲料などを提供しなければならないということも定められており、今年は、屋外での作業中止等が発動されていたはずですが。

中国のキャッシュレス社会

中国のキャッシュレス化は、凄い勢いで進んでいます。なかでもデビット機能を持つ銀聯カード（Union Pay）はかなり普及しており、実店舗を中心に広く利用されています。

日本でも、中国人の爆買いブームの頃から利用可能なクレジットカードとして銀聯カードのマークが追加されるようになり、目にするが増えました。しかし、銀聯カードの殆どはデビットカードです。私も中国で銀行口座を開設した際に、その場で発行してもらいました。中国国内ではこの銀聯カードがあれば、殆どの店舗でキャッシュレスで買い物ができます。決済のたびに暗証番号入力とサインを求められるという煩わしさはありますが、現金を持ち歩くよりはずっと便利です。

このカードの普及とキャッシュレス化が進んだ背景には、偽札の流通が多いことや盗難などのリスクが高いことは勿論ですが、現金決済の場合、

大量の紙幣を持ち歩かなくてはならないという煩わしさが挙げられます。中国の最高額紙幣「100元」は日本円に換算すると約1,600円です。そのため10万円相当額をもち歩く場合、100元紙幣を60枚も持ち歩くことになります。

ある知り合いの駐在員が、夜にタクシーを利用して降車する際に、紙幣すり替えの被害にあっていたことに気付きました。持っていた100元紙幣7枚が偽札にすり替えられていたようです。中国では、街中のコンビニ、飲食店、スーパー、百貨店、銀行などの店頭で紙幣が偽造か本物かを調べる識別機が置いてあり、現金を信用しないという風潮があります。

さらに、中国でもここ3~4年の間にスマホが急速に普及しましたが、それを背景に爆発的に増えた決済手段が、アリペイ（支付宝）やウィーチャットペイです。アリペイは、タオバオ（淘宝网）やティーモール（天猫）といったネットサイトを運営するアリババ（中国名：阿里巴巴）が提供するアプリです。ウィーチャットペイは、テンセント（中国名：騰訊）が作った無料インスタントメッセージングアプリ「微信」（中国版LINEのようなもの）のアカウントを持つ人々を対象に広がっています。これらの企業はインターネット企業であり、既存の金融サービスを展開する事業者のビジネスモデルとは違い、急速に普及しています。

日本でカード決済やおサイフケータイなどを導入する場合は、専用端末を置いて対応していますが、中国ではコンビニなどでもスマホの画面に自分のQRコードを表示して、店側がバーコードリーダーで読み取るだけで支払完了です。小銭を持ち歩く必要がなく、カード決済に必要な暗証番号の入力やサインをする手間もかかりません。支払いが非常にスピーディーです。さらに小規模な店舗でバーコードリーダーが無い場合でも、店側がアプリのアカウントだけ用意すれば、あとはQRコードが印刷された紙を置いておくだけで導入可能です。店頭にあるQRコードを消費者が（アプリを

インストールした）スマートフォンで読み取り、支払額を入力して、暗証番号を入力するだけで支払いが完了します。日本における電子マネーの感覚と比べると、驚くほど簡易的ですが、設備投資がほぼゼロでも導入できることが強みとなっています。

このQRコード決済の特徴は、個人間送金における相手のアカウントのQRコードを読み取って指定の金額を送金するという仕組みをそのまま店舗決済へ適用した点にあります。つまり、同じ送金サービスのアカウントさえあれば、誰でもどんな店舗でも投資や特別な審査なしに利用できるという利便性があります。これが従来の加盟店方式の電子マネーやクレジットカード決済と大きく異なる部分です。また、アリペイとウィーチャットペイの送金手数料は、個人や小規模な店舗はほぼ無料となっており、利用のハードルが非常に低いことも挙げられます。都市部では「コンビニから露天まで、どこでも使える」という現状につながっています。

さらに、中国の銀行口座からアプリに直接チャージできたり、逆に資金を中国の銀行口座に返金できるほか、ネットで買い物したときの決済、携帯電話料金のチャージ、水道光熱費の支払い、友人知人とのお金のやり取り、割り勘機能やお年玉さえアプリで配ったりと、これら殆どの取引が無料で行えます。安全性を高めるためのセキュリティ対策も、指紋認証とパスワードロックが選べます。

日本でも導入が始まっているようですので、今後の普及が進むかどうか注目です。

このレポートが発行される頃には、暑さも終わり10月になっていると思います。涼しい秋を迎えていることを祈っています。また、私の任期も折り返し地点を過ぎることになります。残りの任期を精一杯頑張っていきたいと思います。

以上